

すべては天皇の命令である。そのために米軍は発砲及び空爆を停止した』という意味のものであった。

「私は何だか本当のようだと思った。でもよく考えてみると、ここ数日は砲撃はなく、またロッキードもグラマンも来てない。本当かも知れないぞ」と、そう思い直すと急に元気が出たという。筆者の自宅の庭には、「不戦」碑を建立している。その像は山中でひざをついた兵士の像であった。

自らのルソン戦場体験を語りながら、無謀な戦争を振り返り、無惨にも死んでいった戦友の御魂に思いを馳せている。そして、この『ルソン島敗残実記』は、同氏の戦友を思う鎮魂の記録でもあると思わずにはいられない。

体 験 記

福島県 荒明文衛

私は、大正十（一九二一）年六月三十日、福島県河沼郡高寺村外二ヶ村組合村大字東松原杉山で、農業の父貢、母鶴栄の兄弟十人の長男として生まれました。

昭和十六（一九四一）年四月、徴兵検査を受け、甲種合格で、現役兵として、昭和十六年十二月十二日、朝鮮歩兵第七十六連隊に入隊、第一機関銃中隊自動車班に編入されました。同年十二月二十二日、洪儀に着き、直ちに国境の警備に就きました。

昭和十七年一月八日は陸軍記念日に当たり、夜、兵団長閣下の閲兵、訓示がありました。訓示では「君たちは消耗品である。不足すれば一銭五厘のはがきを出せば、いくらでも兵を集められる。日本国は物資が乏しいため兵器と被服を大切に、こ

とがあれば一週間でウラジオストックを攻撃する」と言明された。

国境警備地は北朝鮮一帯で、中隊の兵舎は、北朝鮮慶興郡曾山、標高五百メートルぐらいの山で、豆満江の河を挟んで、北側にソ連と満州があり、兵舎は曾山南側の麓の地下に造られ、電気も水道もなく、誠に不便でした。

一月八日の兵団長の閲兵の際は気温零下三〇度の寒さで、左手小指が凍傷に罹り、初めての体験で、その苦痛、苦労には大変に難儀しました。

昭和十八年二月、召集補充兵教育係り助手を命ぜられ、十五年兵森田春一郎上等兵と共に教育の任に当たり、また十八年徴集の現役兵教育係り助手を森田君と共に、六月より務めました。

昭和十八年十二月一日付きで陸軍兵長に任ぜられ、第七十六連隊速射砲中隊に配属換えになりました。これは自動砲の威力がなく、廃砲となったためでした。

昭和十九年二月二十八日、第八派遣隊に転属を

命ぜられました。

歩兵第七十六連隊第三大隊に我が速射砲小隊一個小隊が独立小隊として、私が指揮班長、小隊長を含めて十一人、第一分隊は柳沼軍曹以下十一人、第二分隊は五十嵐伍長以下十一人、合計三十三人は、三月三日、朝鮮の釜山港を出発、南洋群島のトラック島に向かいました。

船は貨物船、その速力は最高五ノットくらいしか出ず、人員を多く乗せられるように天井を低く改造されて東京港を出港、一路南下しました。途中、時化に遭遇し、船が波の低いところにあるときは周囲どこを見ても海ばかり、波の高い所にあるときは、どこを見ても空ばかり、全く初めての体験でした。

このため船酔いで食事もとれず、あまつさえ発熱で寝たっきりの状態になり、熱は四二度を越し、背中には床ずれが生じました。

馬場恒吉軍医中尉殿の診察、治療を受けました。回復せず、日増しに衰弱し、軍医殿より、再起

不能といわれ、狭い船室に寝かされておりました。

そうしているうち米軍の攻撃がありました。船内に「退避！」との号令がかかり、乗組員は我先にと甲板に出るため、狭い階段を上ります。私は動くことも出来ず、運を天に任せ、諦めていました。

小山上等兵も一緒に寝ていましたが、彼は元気が良く、甲板に上がって看病するようにと、二人は分かれさせられました。こんなことでは、なんとも情けなく、こんな船の中では死にたくない、いかにして元気を取り戻すかを考えていました。

それには食事をする事しかないと、考えたのですが、戦友に頼んで炊事場より梅干をもらい、重湯と一緒に呑み込むように流し込むのですが、すぐ吐いてしまいます。一日三度の食事は、このように続けていました。

昭和十九年三月二十日、サイパンに入港、いつとき、ここに停泊しました。このとき、私の分隊長の小山上等兵の容態が急変し、軍医殿に往診を

願ひ、注射を打って頂いたのですが、目の前で眠るがごとくに死亡しました。三月二十五日のことでした。

私どもがトラック島七曜島に上陸後、私も Deng 熱病に罹り、馬場軍医殿に来診をお願いして注射を受け、十日ほど寝込みました。しかし治癒しましたが、四月七日に再発し、再び五日間、また第三回目には三日ほど寝込みました。

昭和十九年四月二十一日午後九時ごろ、向かいの木曜島方面より来襲した米軍機の空爆を受けました。そのとき十発の爆弾が落とされ、九発は海中に、一発が宿舎より三十メートル地点に落下してきました。

私は「空襲！ 退避！」と号令をかけたのですが間に合わず、「伏せ！」というと同時に破裂しました。私共の速射砲小隊三十二人中、小隊長ほか分散して避難しました。小隊長は Deng 熱で寝ており、金光上等兵が小隊長を背負って近くの防空壕に入れました。小隊長の腰から足にかけて出血

しており、応急処置をして野戦病院に搬送しましたが、途中で死亡しました。爆弾の破片が腰骨より肺に達しており破片の大きさはマッチ箱くらいでした。

六月十五日ごろ、米軍はトラック島に対して約一週間、艦砲射撃と空爆を加えてきました。激しいときは一日に四千機に及ぶグラマン戦闘機の機銃掃射と反転上昇の際には爆弾の投下を繰り返し返していました。地上に少しでも動くものがあれば、この容赦なき攻撃を加えてきました。

このため私どもが大隊本部に連絡に行くにも、普通歩いて一時間四十分程度ですが、五時間も要する始末でした。一緒に行動していた金光上等兵は昭和十八年特別志願の朝鮮出身の兵隊で、当日は小隊長の当番兵をしておりました。

この米軍の攻撃に対して、トラック島の日本空軍は約五十機が迎撃に出動しましたが、四、五機しか帰還しませんでした。米軍の重爆撃機は、ソロモン島方面より百機、二百機と来襲し八千メー

トル上空より水平爆撃を加えてきました。

この米軍機の空襲のたびに、向かいの木曜島、北部の水曜島の山頂より昼は狼煙、夜は曳光弾が上がり、その交点に日本の艦隊や夏島の飛行場があるということ、アメリカ側のスパイの仕業であるといわれていました。我々歩兵砲中隊全員が小銃、拳銃で見張りをしましたが、スパイらしきものは発見できませんでした。

このころ既に、我が歩兵砲中隊に食糧の補給は全くなくなり、草木、野鼠など食べられるものは何でも食べる有様でした。調味料もなく、海水で汁を作りましたが苦くて食べられなく、それで塩を作り、サツマイモを栽培しました。しかし収穫できるまでの四カ月は栄養失調兵も出て、大変、難渋な生活を体験しました。

昭和十九年七月七日、サイパン島は玉碎し、米軍はサイパン島を基地に、日本本土に対する爆撃を始めたのです。